

## 映画の中の新聞記者《外国映画編》

以下は『新聞かわら版』（日本新聞協会教育文化事業部発行、1992～95年）に掲載された石坂昌三氏（新聞学科昭和32年卒、映画評論家、元日刊スポーツ新聞社勤務）の映画紹介である。石坂氏は『小津安二郎と茅ヶ崎館』（新潮社刊）で1996年第14回エッセイスト・クラブ賞を受賞している。

スクリーンに登場した新聞記者「日本映画編」が、予想もしなかった反響でしたので、アンコールにおこたえして「外交映画編」をまとめてみました。

映画は、時代と社会を映す鏡だと言いますが、映画の新聞記者像も、時代に敏感で、多種多様に変貌してきたようです。星の数ほどもある世界の映画ですから、当然、広い残しはあるかと思いますが、主要作品は、ピックアップしたつもりです。

なお、この「外国映画編」では、新聞記者に限定せず、同じ取材・報道にかかわる放送界まで広げて収録しました。執筆は石坂昌三氏（映画評論家）に協力いただきました。

### 犯罪都市（1930年、米、リュイス・マイルストーン監督）

ベン・ヘクトとチャールズ・マッカーサーのヒット舞台劇『フロント・ページ』を、『西部戦線異状なし』のマイルストーンが映画化した。アドルフ・マンジューとパット・オブライエンの新聞記者が、犯罪都市シカゴの裁判所にある新聞記者の溜り場を舞台に、特ダネのため私生活を犠牲にして市政の腐敗を暴露する記者根性を描く。ギャング映画の流行に乗った企画だったが、機関銃のようなセリフ連発の舞台劇の映画化で、新登場のトーキーの可能性を試み注目された。

### 或る夜の出来事（1934年、米、フランク・キャブラ監督）

新聞記者のスタイルを創った伝説の映画。帽子をあみだにかぶり、緩めたネクタイに、くわえタバコ。クラーク・ゲーブルの記者が長距離バスで、金持ちの家出したジャジャ馬令嬢クロード・コルベールと乗り合わせる。意地の張り合いが、いつしか恋に変わって行くまでを、明るいギャグとユーモアで描いた痛快作。

特ダネと迷いはするが、莫大な懸賞金には目もくれない記者気質。娘の相手が新聞記者と知ってウサン臭がるが、見直す父親。以後の新聞記者ものばかりか、喜劇にも影響を与えた。

作品、男優、女優、監督、脚本とアカデミー賞を独占した。

### オペラ・ハット（1936年、米、フランク・キャブラ監督）

脚本ロバート・リスキン、キャブラ監督のコンビのまたまたの快作。ゲリー・クーバーの田舎に住む青年に莫大な遺産が転がり込む。ニューヨークに出る彼を追うジーン・アーサーの敏腕女性記者。彼を取り巻くタカリ屋を尻目に、青年は失業農夫に分配すると声明、アツといわせる。彼の正義感、純朴さに女性記者はホれてしまう。

アカデミー監督賞。アメリカの夢と理想を楽しく語る「キャブラ調」を確立した。

### **地球を駆る男** (1938年、米、ジャック・コンウェイ監督)

ちょっとやくざっぽくて、男らしいクラーク・ケブルは、あちこち飛び回る新聞記者やカメラマンにぴったりだった。この映画はニュースリールのカメラマンを主人公にしたアメリカらしいスピードとギャグに満ちた明朗喜劇。

### **His Girl Friday** (1939年、米、ハワード・ホークス監督) [アイ・ヴィ・シー税込み 3,600円]

日本では未公開だったが、『フロント・ページ』映画化第2作。主人公を女性新聞記者に変え、喜劇仕立てにした。ロザリンド・ラッセルは、記者を辞め、新婚生活に入るため、ケーリー・グラントの編集長に挨拶にゆく。クセ者の編集長はあの手この手で引き留めにかかる。彼女は警官射殺事件の取材をさせられ容疑者が脱獄して、いよいよ深みにはまり込む。

ホークスは冒険活劇の名匠だが、女性を魅力的に描くことでも天才的であった。活発なラッセルの女性記者も彼女最高の演技でグラントとの舌戦が見もの。

### **海外特派員** (1940年、アルフレッド・ヒッチコック監督)

第二次大戦直前、風雲急なロンドンに派遣されたジョエル・マックリーのアメリカ人新聞記者が、ナチのスパイによるオランダ老政治家の誘拐事件に巻き込まれる。

ヒッチコック独特のサスペンス、奇抜な手法とユーモアで描いた傑作。この頃は、ハリウッドでは、スリラー映画の評価が低く、新聞記者役にゲーリー・クーパーを交渉したが断られた裏話もある。

### **群集** (1941年、フランク・キャブラ監督)

新聞社をクビになった女性記者バーバラ・スタンウィックが「ジョン・ドウ」という失業者の名前で「社会に抗議して市庁の塔から投身自殺をする」と投書を書く。編集長はジョン・ドウの手記を連載すれば新聞の売れ行きが伸びると考え、失業した野球選手ゲーリー・クーパーをドウに仕立てる。彼はバーバラと全国を遊説、ラジオに出たりして、民衆の人気者になった。だが、ニセ者だと暴かれ、市庁の塔から飛び降りを決意。病床から駆け付けたバーバラによって思い止まる。

### **影なき男の影** (1941年、米、W・S・ヴァン・ダイク監督)

オールド・ファンお馴染みのウィリアム。パウエル＝マーナ・ロイの探偵夫婦『影なき男』シリーズの第4作だが、この作品には話の展開に絡んで二人の記者が、対照的な善玉と悪玉。バリー・ネルソン演じる記者が正義感の純情記者で、主人公のニック探偵の片腕として活躍。世の新聞記者の自尊心をくすぐるのに対し、アラン・バクスターの記者は恐喝専門で因果応報、非業の死を遂げる。これなら、記者をいくら憎々しく書いても相殺されるという寸法だ。

### **市民ケーン** (1941年、米、オーソン・ウェルズ監督)

ラジオ・ドラマ『火星人襲来』で、軍隊出動の騒ぎを起こした天才、オーソン・ウェルズにRKOが無条件で撮らせた映画。ウェルズは当時26歳。製作、脚本、監督、主演を兼ねた。

新聞王ケーン(オーソン・ウェルズ)が謎の言葉「バラのつぼみ」を残して死んだ。新聞記者(画面には出ない)が、後見人、昔の親友、後妻などを取材し、ケーンの波乱の人生を浮き彫りにして行く。それは富みと権力をほしいままにしながらも、孤独で空虚な一生であった。新聞王ハーストをモデルにしたため、興業的には失敗したが、従来 of 順を追うストーリーを無視したパズル的な展開の脚本構成の巧妙さ、黒白極端な光と影の心理描写、パン・フォーカス撮影など、ウェルズ処女演出のこの映画は革命的で、比類のない完成度で、世界の映画史上ベストテンを選ぶと必ず上位を占める。

### **女性 No.1** (1942年、米、ジョージ・スティーヴンス監督)

キャサリン・ヘプバーンは、新聞社のハデな女性論説記者。彼女の相手はスペンサー・トレイシーの地味な運動記者。『じゃじゃ馬馴らし』を下敷に、新聞社を舞台にしたコメディ。

ハリウッド女優No.1の知性の持ち主と言われ「中性的」魅力で売り出した、お瘦せて少々生意気なヘプバーンは、女性論説委員でその魅力を十二分に発揮。それを受けるハリウッドの頑固者のトレイシーも好演。この初共演で二人は意気投合、「ハリウッドの最高カップル」が生まれた。

### **ギャグニーの新聞記者** (1943年、米、ウィリアム・K・ハワード監督)

やくざっぽいと見られる新聞記者だが、『汚れた顔の天使』などギャング・スターで一時代を築いたジェームズ・ギャグニーが演じている。ルイス・プロムフィールド原作の映画化。異色の西部劇版・ブン屋ものだ。

西部の町にふらりと現れたギャグニーの旅の風来坊が、一宿一飯の恩義で老夫婦の経営する新聞発行を手助けし、町の悪党どもを片付けて、いずこともなく去って行く。

### **G・I・ジョー** (1945年、米、ウィリアム・ウェルマン監督)

東京宝塚劇場は、敗戦後、米進駐軍に接收され「アーニー・パイル劇場」と呼ばれていた。アーニー・パイルは、沖縄戦線で戦死した従軍新聞記者の名前である。戦争で新聞記者も戦場へ。『G・I・ジョー』は、バージェス・メレディス演じるヨーロッパ戦線で活躍していた頃のアーニー・パイルの物語。北アフリカで悪戦苦闘のすえ敗北を喫し、イタリアに転じて戦うアメリカ部隊の様相が、パイルの手記のかたちで描かれていく。

ウェルマン演出は、ヒロイズムを排し、弾丸下に置かれた人間を冷静に見つめた佳作であった。

### **紳士協定** (47年、米、エリア・カザン監督)

反ユダヤ主義の記事を連載するため、自らユダヤ人と名乗ったグレゴリー・ベックのライターが、いろいろの差別、偏見を体験する。編集長、ファッション記者なども絡む。

カザンの出世作で、ペックの代表作だったが、占領下の日本でアメリカの恥になるような内容の映画は上映を認められなかったため 87 年に公開された。

### **出獄** (1948 年、米、ヘンリー・ハサウェイ監督)

シカゴ・タイムスの記者ジェームズ・マクガイヤーが体験した実話を映画化したセミ・ドキュメンタリー。44 年シカゴ・タイムスに「32 年 12 月 9 日、バンディ巡査を殺した犯人を告げた人に 5000 ドル進呈する」という広告が出た。ジェームズ・スチュアートの記者が、広告の連絡先を訪ねると貧しい掃除婦で、巡査殺しの犯人として 99 年の刑を受け入獄中の息子フランク（リチャード・コンテ）の無実を証明したいため、貧しい生活の中から貯めた懸賞金を出すことにしたという。記者は刑務所にフランクを訪ね、その人柄から怪しい事件と究明に乗り出す。

足を棒にしての取材活動。植字タイプ、電送写真の操作なども見せた。スチュアートは「アメリカの良心」が背広を着たようで、素朴で、誠実、やり始めたらあきらめない人柄。地道な取材活動からヒューマニティがにじみ出る好演だった。

### **ローマの休日** (1953 年、米、ウィリアム・ワイラー監督)

『或る夜の出来事』に並ぶ、新聞記者ものの代表作。新聞記者と王女アン（オードリー・ヘプバーン）が、ローマで大使館を抜け出す。公園のベンチで寝ているアンをアメリカの新聞記者ジョー（グレゴリー・ペック）が王女とも知らず自分のアパートに連れ帰る。夜が明けて、王女と知った新聞記者は、プロ精神を取り戻し、ローマ見物のアン王女の特ダネ写真を思いつく。

スクーターにアンを乗せて走るジョー。カメラマン、アーヴィング（エディ・アルバート）が二人を追い、ライターに仕込んだ小型カメラで王女を盗み撮りする。そうとは知らず、のびのびと王女はローマ観光を楽しむ。

大使館では王女失踪で大騒ぎ。本国から探偵が呼ばれ、夜の遊覧船でジョーとダンスする王女を発見する。ジョーはアンを連れ、河に飛び込む。二人の間に愛が芽生えていた。

数日後、アン王女の記者会見。ジョーの目を見つめるアン。アーヴィングは隠し撮りしたフィルムを土産にそっと渡した。

アメリカ映画デビューのヘプバーンの個性的な新鮮な魅力。スマートで好ましいペックの記者ぶり。ローマ観光の楽しさ。名匠ワイラーの演出とギャグの冴え。一頃は新聞社受験の動機を聞かれ「『ローマの休日』をみて」と答える者が、少なからずいた。

### **慕情** (55 年、米、ヘンリー・キング監督)

アカデミー賞を取ったサミー・フェインの主題歌、異国情緒たっぷりの香港ロケの美しさで大ヒットしたこの映画は、中国人と英国人の混血女医のハン・スーインの自伝小説の映画化。ジェニファー・ジョーンズの美しい女医は、パーティでアメリカ人の新聞記者ウィリアム・ホールデンと知り合う。男にはシンガポールに妻がいるのだが、二人は熱烈に愛し合う。朝鮮で戦争が起こり、戦場に飛んだ新聞記者は戦死。再び戻っては来なかった。

### **群集の中の顔** (1956年、米、エリア・カザン)

田舎の放送局でインタビュー番組を担当する女性アナ、パトリア・ニーが、留置場にいた青年アンディ・グリフィスの歌を放送したところ、大評判になり青年は全米の人気者になる。が、それにつれ青年の人間性は失われ、名声と権力を追う怪物に変化する。それを悲しんだ女性アナは、大衆をあざける青年スターの声を無断で電波に乗せた。彼はたちまち名もない存在に落ちてしまう。力作。

### **成功の甘き香り** (1957年、米、アレキサンダー・マッケンドリック監督)

芸能界に多大な影響力を持つ新聞のコラムニスト、バート・ランカスターは、やり手のプレス・エージェント、トニー・カーティスを使い、妹と歌手の仲を裂こうとする。芸能ジャーナリズムの冷酷さを暴いた異色作。

### **甘い生活** (1960年、伊、フェデリコ・フェリーニ監督)

マルチェロ・マストロヤンニ演じる主人公は、作家を夢見てローマに出てきたが、志破れて社交界のスクンダルを追うゴシップ記者。

あこがれの大都会は、退廃と無気力が支配していた。彼は大富豪の娘アヌーク・エーメと場末の宿で一夜を明かし、ハリウッドのグラマー女優アニタ・エクバーグと狂乱の夜を過ごす。快楽に疲れ果てた海辺で見た腐った怪魚は彼らの姿そのものだった。60年カンヌ映画祭グランプリ受賞作。

### **招かれざる客** (1967年、米、スタンリー・クレイマー監督)

人種偏見と戦ってきたスペンサー・トレイシーの新聞社社長と奥さんのキャサリン・ヘプバーンの娘が、婚約した医師が黒人(シドニー・ポワティ)だったのでトレイシーは日ごろの主張に反してショックを受ける。しかし、話すうちに医師が人柄、識見ともに立派なので結婚を許す。トレイシーの遺作。

### **Z** (1969年、仏、アルジェ・コスタ・カヴァラス監督)

ギリシャで実際にあった暗黒政治事件の映画化。大物政治家Z(イヴ・モンタン)が殺されるが、当局は、自動車事故と発表する。疑問を抱いたジャン・ルイ・トランティニヤンの判事が、ジャック・ペランの新聞記者の協力で暗殺だったことを突き止める。だが、七人の証人は行方不明になり、事件は、闇に葬り去られる。70年アカデミー外国映画賞。

### **フロント・ページ** (1974年、米、ビリー・ワイルダー監督)

三度目の映画化は、題名はズバリ『フロント・ページ』だが、ジャック・レモン、ウォルター・マッソーのコンビでワイルダーお得意の爆笑喜劇に仕立てたのがミソ。原作の話の柱を崩さず、新聞記者の世界のおかしさをお笑いで料理した腕は、さすが。1929年のシカゴ。『エグザミナー』のトップ記者ヒルディ(レモン)が、結婚してフィラデルフィアに行くといい出したのでデスクのバーンズ(マッソー)は大弱り。何とか引き留めようとす

る。裁判所の記者クラブでは、各社の記者が相も変わらずポーカー賭博をしている。そこへ銃声。ヒルディを除き、皆飛び出す。入れ替わりに死刑囚が逃げ込んでくる。ヒルディは犯人をデスクに隠し、すわ特ダネとバーンズに電話するが、記者たち戻ったり出たり。バーンズの慰留作戦も大騒ぎ。

なお、4度目の映画化、デッド・チャコフ監督作品は、『スイッチング・チャンネル』(88年)の題名で、テレビ・レポーターの話に変えているというのが日本未公開。

### **大統領の陰謀** (1976年、米、アラン・J・パクラ監督)

ウォーターゲート事件の内幕を暴露し、ニクソン大統領を退陣に追い込んだ「ワシントン・ポスト」紙の記者カール・バースタインとボブ・ウッドワードが書いた『すべての大統領の部下』の映画化。二人の記者を実名のままダスティン・フォフマン、ロバート・レッドフォードの人気スターが演じ、ワシントン・ポスト紙の編集局をそっくり再現したセットが評判になり、ニクソン大統領はテレビが面でも出演している。それにしても、アメリカの新聞社の編集局は、明るく、広々していて、整然としているのに驚いた。

1972年6月17日深夜、ワシントンのウォーターゲート・ビルにある民主党本部に5人の男が侵入して逮捕されるが、ポスト紙の記者バースタイン(レッドフォード)とウッドワード(フォフマン)は、少しでも関係ありそうな人物を訪ね根気よく取材を始める。ポスト社の編集局では、ジェーン・ロバーツ、マーティン・バルサム、ジャック・ウォーデンといった達者で味のある俳優の扮した局長、部長たちが、二人の報告で次々と作戦を練り、二人は歩き回り、ディープ・スローと呼ばれる人物の情報で大統領を追い詰める。

パクラ監督は、二人の記者を英雄的に描かず、実話の再現に努め、スターを使ったドキュメンタリーのような。取材活動の描写は克明で、従来の新聞記者ものにはない新しさは出たが、映画としては地味すぎる嫌いもあった。

### **ネットワーク** (1976年、米、シドニー・ルメット)

視聴率という実体のない怪物に支配されたテレビ界の内幕を暴いた問題作。

UBSテレビ局のニュース・ワイド番組の視聴率が急落する。キャスターのピーター・フィンチがノイローゼになり、自殺を予告し視聴率を盛り返す。番組担当のウィリアム・ホールデンは彼を降ろそうとするが、野望に燃える編成部長のフェイ・ダナウェイは、フィンチを煽り、ついに過激派を雇って彼を射殺させ、視聴率のため衝撃の中継をする。

### **カプリコン1** (77年、英、ピーター・ハイアムズ監督)

アメリカの有人火星宇宙船が打ち上げられた。世界中の人々がテレビを見守る中、火星に降り立つ三人の宇宙飛行士。だが、その歴史的瞬間は、テレビのセットで撮影されたものだった。NASAの壮大なインチキに一科学者が気付き、消される前にエリオット・ゴルトの新聞記者に話す。彼が取材すると確かにおかしなことばかり。宇宙飛行士たちも抹殺されると悟り脱走する。人を食った発想の娯楽サスペンス。NASAが撮影に協力した寛大さも面白い。

### **スーパーマン** (1978年、米、リチャード・ドナー監督)

お馴染み「スーパーマン」の日常の姿は、大都会の新聞社に勤める野暮(やぼ)で冴えないクラーク記者なのである。1933年に劇場で誕生し、50年代にテレビのシリーズ人気を呼んだ『スーパーマン』を大型新人クリストファー・リーヴを抜擢、SFX大作として映画化した。

惑星クリプトンから送り込まれたリーヴは美人記者のマーゴット・キッターと親しくなるが、事件がおきると赤マントのスーパーマンに変身。空を飛び、地球の悪をやっつける。映画のシリーズは第3作までつくられている。

### **チャイナ・シンドローム** (1979年、米、ジェームズ・ブッリジス監督)

TV局の人気キャスター、ジェーン・フォンダは、原子力発電所を取材中、振動が起こり、ジャック・レモン(笑いのない真面目な役)の技師が慌てるのを見かけ盗み撮りする。事故の特ダネ番組は製作部長が許さず、録音係は殺され、彼女も命を狙われる。題名は、原発事故が起こったら地球の裏側にまで核の溶解物は達するという意味だが、アメリカでの公開が、スリーマイル島の原発事故と重なり大反響を呼んだ。

### **Oh! ベルーシ絶体絶命** (1981年、米、マイケル・アブッテド監督)

ジョン・ベルーシは、政財界の悪事を暴き続けるシカゴの敏腕記者だが、ロッキー山中にいて絶対にインタビューできないといわれる謎の鳥類学者の取材に行く。学者は美人のブレア・ブラウンだった。しばらく生活をともにするうちベルーシは彼女を好きになり、けがをした彼を彼女も好きになる。エコ調のロマンチック喜劇。

### **スクープ 悪意の不在** (1981年、米、シドニー・ポラック監督)

フロリダで港湾労働組合の指導者が失踪する。解決を焦るFBIは父親がマフィアだったというだけで倉庫係ポール・ニューマンを犯人に仕立て、特ダネを狙う女性記者サリー・フィールドに極秘資料を盗み見できるようにして記事を書かせる。倉庫係は抗議する。彼は彼のアリバイを証明するため、彼のガール・フレンドの墮胎に付き添っていたことまで記事にし、彼女を自殺に追い込んでしまう。報道のモラルを問う力作。脚本は記者経験者で、サリーの張り切りすぎて勇み足の女性記者も現実味がある。

### **レッズ** (1981年、米、ウォーレン・ビューティ監督)

ロシア革命のルポルタージュ『世界を震撼させた十日間』のジョン・リードの伝記。『俺たちに明日はない』のウォーレン・ビューティが製作・監督・主演。アカデミー監督賞を得た力作。

ハーバードを卒業し社会運動に身を投じたリード(ビューティ)は、急進派ジャーナリストとして売り出し、ルイズ(ダイアン・キートン)と同棲。ユージン・オニール、エマ・ゴールドマンらと親しくなる。第一次大戦が始まり、リードはロシアに行き1917年の十月革命を目撃する。

**ベロニカ・フォスのあこがれ** (1982年、西独、ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー監督)

1955年のミュンヘン。雨の夜、ヒルマー・ターテの新聞記者が、ヴェロニカと名乗る往年の人気スター（ローゼル・ツェルヒ）と出会う。彼女に興味を持った記者は、ヴェロニカの過去と現在を探り始め、彼女の財産を狙う女医の陰謀をかぎつける。だが、調査に協力した恋人を殺され、やがてヴェロニカも悲劇的最後に迎える。ドイツ映画らしい探索型ドラマ。

**アンダーファイヤー** (1983年、米、ロジャー・スポティスウッド監督)

79年、動乱のニカラグア。報道写真家のニック・ノルティ、タイム誌記者のジーン・ハックマン、女性キャスターのジョアンナ・キャシディが銃弾の下を取材に走り回る。ニックは親しくなったゲリラを政府の傭兵に殺され怒り狂い、ハックマンは道を聞こうとして政府軍に射殺される。取材で国際的仕事が絡んだ内戦の陰惨な状況が描かれる。

**キリング・フィールド** (1984年、英、ローランド・ジョフィー監督)

プロデューサーのデヴィッド・パトナムは国際的視野に立つ社会派の実力者。赤色クメールに支配されたカンボジアの惨状を再現したスケールの大きな作品。プノンペンを舞台に、取材活動をしていたアメリカ新聞記者シャンバーグ（サム・ウォターストン）と現地人の助手ディプラン（ハイン・S・ニョル）は、クメール軍の侵入で大混乱、危機に陥る。やっと脱出したシャンバーグ。残されたプランは、強制労働所から逃げる。苦難の旅で目にした光景は白骨の山、背筋が凍る地獄だった。シャンバーグはピューリッツァー賞授章式で、プランと再会、恩人と讃える。

**心みだれて** (1986年、米、マイク・ニコラス監督)

ウォーターゲート事件の英雄カール・バーンスタイン記者夫婦のプライベート・ライフをメリル・ストリープとジャック・ニコルソンの人気スターで描いたドラマ。元夫人で料理評論家のエフロン著書の原作。離婚経験者同士が知り合い、結婚し、出産があって、夫の浮気で別れるというよくある話だが、モデルがマスコミの「人気者」ということが、演じるスターの人気でか、アメリカでは結構客が来たそうだ。

**サルバドル** (1986年、米、オリバー・ストーン監督)

問題児監督O・ストーンが『プラトーン』の前に撮った内戦の内幕を暴いた傑作。ジェームズ・ウッズ扮する報道写真家のリチャード・ボイル（この作品の脚本をストーンと共同で執筆）は、食いつめて動乱のエルサルバトルに行く。アメリカの援助を受けた政府軍と左翼ゲリラの激しい戦闘で苦しむ民衆。ボイルは、戦争の真相を伝えようとする命知らずの写真ジャーナリスト、キャサディ（ジョン・サベージ）を知る。エスカレートする政府軍の残虐行為。ゲリラ側で取材中キャサディは戦死。彼のフィルムを持って帰国したボイルは、祖国の第三世界政策を弾劾する。



**遠い夜明け** (1987年、米、リチャード・アッテンボロー監督)

南アメリカのアパルトヘイト問題に真正面から取り組んだスペクタクル力作。ケヴィン・クラインの新聞編集長は、黒人指導者ピコ(デンゼル・ワシントン)と接触する。政府の弾圧は白人の彼にまで及び、逮捕されたピコは虐殺される。葬儀の黒人たちに襲い掛かる警官隊。その凄まじい実情を世界に知らせる使命感からクラインは家族を連れ、監視の目を潜って国外脱出を決行する。

**ブロードキャスト・ニュース** (1987年、米、ジェームズ・L・ブルックス監督)

ワシントンのテレビ・ニュース局を舞台に女性プロデューサーのホリー・ハンター、良きコンビのライター、アルバート・ブルックス、運動部を経てアンカーマンに抜擢されるウィリアム・ハートの三人のテレビマンの人生を、駆け出しのヤング時代から、年月経て再会するまで、テレビ局の内部、番組の楽屋を絡めて爽やかに描いた作品。

**イヤー・オブ・ザ・ガン** (1991年、米、ジョン・フランケンハイマー監督)

テロ団体の取材を続けるアンドリュー・マッカーシーのジャーナリストが「赤い旅団」の爆弾騒ぎに街中が恐怖におののくローマに特派される。アンドリューは、あるパーティでシャロン・ストーン的女性ジャーナリストと出会う。そして、自分の書いた小説に酷似した事件に巻き込まれていく。

**ペリカン文書** (1993年、米、アラン・J・バクラ監督)

法学部の美人女子学生ダナ(ジュリア・ロバーツ)の書いた論文が、迷宮入り寸前だった最高裁判官殺しの真相を暴くカギを握っていた。論文はFBIに渡り『ペリカン文書』と名づけられ、ダナの恋人でもあった教授が殺される。彼女自身も命を狙われ、絶体絶命の危機に陥る。彼女が頼ったのは、教授が信頼していた『ワシントン・ヘラルド』紙のグレイ記者(デンゼル・ワシントン)。遂に黒人新聞記者の登場である。頼もしいグレイ記者が、ダナを守り、権力に挑む。

...続く